

真諦訳とされる『仏性論』における「仏性」について

— 『地持経』・『宝性論』・『撰論釈』との関連を中心に —

李 子 捷

はじめに

真諦訳とされる『仏性論』の成立と思想には、不明瞭な部分がまだ多く残っている。高崎直道博士の研究によれば、同じ真諦訳とされる『撰大乘論釈』の如来蔵説は、梵本『宝性論』を縦横に利用しており、その点で『仏性論』・『無上依経』と同質である。梵本『宝性論』の内容は『撰大乘論釈』・『仏性論』・『無上依経』に分散配置されているが、『宝性論』の名は示されていない。¹興味深いのは、『撰大乘論釈』・『仏性論』・『無上依経』は、いずれも真諦訳とされる漢訳経論であり、『宝性論』の内容を活用しているが、その『宝性論』の漢文の注釈書はほとんど現存していないことである。

周知のように、真諦三蔵（499-569）の翻訳事業に対する研究には未解決のままになっている部分があり、真諦訳とされる漢訳経論は必ずしも真諦の手を通して梵本からそのまま翻訳されたとは言えない。筆者は現段階ではこの複雑な問題を解決できない。その代わりに、本論では真諦訳とされる『仏性論』に見える仏性説に絞り、それを『菩薩地持経』と『宝性論』と対比しつつ、その関連性を改めて考察してみたい。

ちなみに、宇井伯寿博士の研究によれば、漢訳の年代としては、『菩薩地持経』→『宝性論』→『無上依経』→『解節経』→『撰大乘論釈』、となっている。²本論はこの流れを念頭に置きつつ、『仏性論』における仏性説について検討したい。

一、『仏性論』と『菩薩地持経』

『菩薩地持経』は北涼の曇無讖（298-433）によってはじめて漢訳されたイ

インド唯識経論であり、『瑜伽師地論』の一部分の同本異訳である。中国仏教の地論師は、その時代にすでに漢訳された『菩薩地持経』・『大般涅槃経』・『大方等大集経』などのインド唯識・如来蔵経論を学び、その知識を身につけてから、菩提流支 (?-527-?) や勒那摩提 (?-?) などのインド論師の翻訳事業を手伝った、というのが一般的な状況であろう。このため、年代的にも思想的にも、『菩薩地持経』などの曇無讖訳の唯識・如来蔵経論がそれ以降の漢訳経論に与えた影響は無視できないであろう。

『仏性論』は「仏性」という概念を非常に重視している。その仏性について、『仏性論』では以下のように述べている。

復次、仏性体有三種三性所撰義、応知。三種者、所謂三因三種仏性。三因者、一応得因、二加行因、三円満因。応得因者、二空所現真如。由此空故、応得菩提心及加行等、乃至道後法身、故称応得。加行因者、謂菩提心。由此心故、能得三十七品十地十波羅蜜助道之法、乃至道後法身、是名加行因。円満因者、即是加行。由加行故、得因円満及果円満。因円満者、謂福慧行。果円満者、謂智断恩徳。此三因前一則以無為如理為体、後二則以有為願行為体。三種仏性者、応得因中具有三性、一住自性性、二引出性、三至得性。記曰、住自性者、謂道前凡夫位。引出性者、従発心以上、窮有学聖位。至得性者、無学聖位。³

また、仏性の体には三種と三性所撰の義があることを知るべきである。三種とは、いわゆる三因と三種の仏性である。三因とは、一は応得因であり、二は加行因であり、三は円満因である。応得因とは、二空によって現される真如である。この空により、菩提心と加行と道後の法身が必ず得られるであろう。この故に応得と称える。加行因とは、いわゆる菩提心である。この心により、三十七品・十地・十波羅蜜・助道の法と道後の法身を得ることができる。これを加行因と名付ける。円満因とは、即ち加行である。加行により、因円満と果円満を得る。因円満とは、いわゆる福慧行である。果円満とは、いわゆる智断恩徳である。この三因のうち、前の一はすなわち無為の如理をもって体と為し、後の二はすなわち有為の願行をもって体と為す。三種の仏性とは、応得因の中に三性がある。一は住自性性であり、二は引出性であり、三は至得性である。記して曰く、住自性とは、いわゆる道前の凡夫位である。引出性とは、発心より以上、有学の聖位を窮める

までである。至得性とは、無学の聖位である。

この部分の意味を簡単にまとめると、「応得因 (= 無為の真如)・加行因 (= 有為の菩提心)・円満因 (= 有為の加行の円満)」という三因があり⁴、この中の「応得因 (= 無為の真如)」には三種の仏性がある。この三種の仏性は、「住自性性 (= 道前の凡夫位)・引出性 (= 有学の聖位)・至得性 (= 無学の聖位)」、というものである。ここで注意すべきは、「此三因前一則以無為如理為体、後二則以有為願行為体」の文章から見ると、『仏性論』に見られる応得因は真如のような無為法である。これにより、この応得因にある三種の仏性も無為法になるはずである。しかし、「住自性性 (= 道前の凡夫位)」と「引出性 (= 有学の聖位)」は、『仏性論』の定義から見ると、無為法と言えるか否か、矛盾が生じてくるのである。ここで問題となるのは、「住自性者、謂道前凡夫位。引出性者、從發心以上、窮有学聖位。至得性者、無学聖位」の文章は、「記曰」の内容に属することである。内容的に言うとは、「記曰」の内容は無為法としての応得因と矛盾すると思われる。つまり、この部分にみられる「記曰」の内容は、真諦以外の人によって入れられたものではあるまいか。

先行研究によれば、『仏性論』に見られる三仏性の「住自性性」と「引出性」は、『瑜伽師地論』の「本性住種姓」と「習所成種姓」、または『菩薩地持経』の「性種性」と「習種性」につながっている。⁵ 一方、『瑜伽論』・『地持経』ではこの二種の種性 (姓) しか説かれていない。『仏性論』に見られる三仏性の一種である「至得性 (= 無学の聖位)」に対応する種性 (姓) は、『瑜伽論』にも『地持経』にも見られない。

この問題を明らかにするために、まず同本異訳の曇無讖訳『菩薩地持経』と玄奘訳『瑜伽師地論』の「本地分中菩薩地」の関連部分を梵本テキストと対照しつつ、検討してみよう。

tatra gotram katamat / samāsato gotram dvividham / prakṛtisthaṃ samudānītaṃ ca / tatra prakṛtisthaṃ gotram yad bodhisattvānām śaḍāyatanaviśeṣaḥ / sa tādr̥ṣāḥ paraṃparaḡato anādīkāliko dharmatāpratīlabdhaḥ / tatra samudānītaṃ gotram yat pūrvakuśalamūlābhyāsāt pratīlabdhaṃ / tad asminn arthe dvividham apy abhipretam / tat punar gotram bījam ity apy ucyate dhātuḥ prakṛtir ity api / (BBh, 2)⁶

この中、種姓とは何か。要約すると、種姓は二種類に分けられる。即ち、本性の存在と完成（された種姓）である。そのうち、本性の存在とは、菩薩たちの優れた六処である。それは展転し、無始時の法性によって得られたものである。完成された種姓とは、過去の善根にもとづいて得られたものである。ここでは、この二種類の種姓はともに意図されている。その種姓は、種子とも言われ、界、性とも言われる。

曇無讖訳『菩薩地持経』：云何為種性、略説有二。一者性種性、二者習種性。性種性者、是菩薩六入殊勝、展転相統、無始法爾、是名性種性。習種性者、若従先來修善所得、是名習種性。又種性名為種子、名為界、名為性。⁷
種性とは何かと言うと、略して説けば二種がある。一は性種性であり、二は習種性である。性種性とは、菩薩の六入が殊勝であり、展転して相統し、無始から法として定まっている。これを性種性と名付ける。習種性とは、前から善を修して得られたものであれば、これを習種性と名付ける。また種性は、種子とも言われ、界、性とも言われる。

玄奘訳『瑜伽師地論』：云何種姓、謂略有二種。一本性住種姓、二習所成種姓。本性住種姓者、謂諸菩薩六処殊勝、有如是相、従無始世展転傳來、法爾所得、是名本性住種姓。習所成種姓者、謂先串習善根所得、是名習所成種姓。此中義意、二種皆取。又此種姓亦名種子、亦名為界、亦名為性。⁸
種姓とは何かと言うと、略して二種があると言う。一は本性住種姓であり、二は習所成種姓である。本性住種姓とは、諸々の菩薩の六処は殊勝であり、このような相を有し、無始の世から展転して傳來し、法として定まって得られたものである。これを本性住種姓と名付ける。習所成種姓とは、前にあった善根によって得られたものであり、これを習所成種姓と名付ける。この中の意味は、この二種をとともに取る。種姓はまた種子とも言われ、界とも言われ、性とも言われる。

『地持経』では「性種性」と「習種性」とが説かれているのに対し、『瑜伽論』では「本性住種姓」と「習所成種姓」とが説かれている。この中、性種性（＝本性住種姓）は本来の存在であり、無始の時からそのまま存在していた種姓である。一方、習種性（＝習所成種姓）に関しては、梵本・玄奘訳『瑜伽論』と

曇無讖訳との相違が見えてくる。梵本は「過去の善根にもとづいて得られたものである (pūrvakuśalamūlābhyāsāt pratilabdham)」と説いており、玄奘訳は「先申習善根所得」と説いている。しかるに、曇無讖訳『地持経』は「従先来修善所得」としか説いていない。即ち、もともと存在していた「善根」があるか否かという問題によって、習種性 (= 習所成種姓) の本来存在が問われている。⁹

話を『仏性論』の対応部分に戻す。前文に述べられているように、『仏性論』は三種の仏性について、「応得因中具有三性、一住自性性、二引出性、三至得性。記曰、住自性者、謂道前凡夫位。引出性者、従発心以上、窮有学聖位。至得性者、無学聖位」と表明している。ここで注意すべきは、『仏性論』の作者は住自性を道前の凡夫位と見なし、引出性を発心以上の有学聖位と見なしていることである。この道前の凡夫位と発心以上の有学聖位は、言うまでもなく、有為法に深くつながっているであろう。上述のように、この「記曰」の内容は『仏性論』そのもので主張される無為法である応得因とは矛盾していると考えられる。¹⁰ また、『地持経』と『瑜伽論』における性種性 (= 本性住種姓) に対応する『仏性論』における住自性性は、道前の凡夫位と定義されている。『地持経』と『瑜伽論』における習種性 (= 習所成種姓) に対応する『仏性論』の引出性は、発心以上の有学聖位と定義されている。このような解釈によれば、凡夫の発心に対応する引出性は、『地持経』に見られる普遍性の傾向を有する習種性 (= 習所成種姓) に近いと言えよう。これより見ると、『仏性論』が『地持経』から受けた影響を無視することはできないと思われる。

以上から見れば、『仏性論』に見られる三種の仏性において、住自性性・引出性と比べれば、至得性の重要性があまり強調されていないようである。この傾向の証拠となるのは、三種の仏性ではなく、『仏性論』は仏性を二種にしか分けられない場合もある、ということである。以下のように述べている。

仏性有二種、一者住自性性、二者引出性。諸仏三身因此二性故得成就。為顯住自性故、説地中宝蔵譬、此住自性仏性者。…中略…取宝蔵以譬住自性仏性。二者引出仏性、従初発意至金剛心、此中仏性名為引出。言引出者、凡有五位。一能出闍提位、二能出外道位、三出声聞位、四出独覚位、五出菩薩無明住地位。此法身能破煩惱殼、其体顯現故。…中略…仏説三身果、一者因住自性仏性、故説法身。…中略…二者因引出仏性、故説応身。…中略…三者因引出仏性、復出化身。¹¹

仏性には二種があり、一は住自性性であり、二は引出性である。諸仏の三身はこの二性によって成就する。住自性を顕すために、地中の宝蔵の譬を説く。これは住自性の仏性である。…中略…宝蔵をもって住自性の仏性を譬える。二は引出仏性である。初発意より金剛心に至り、この中の仏性を引出と名付ける。引出と言うと、五位がある。一は一闍提の位を出ることであり、二は外道の位を出ることであり、三は声聞の位を出ることであり、四は独覚の位を出ることであり、五は菩薩の無明住地の位を出ることである。この法身は煩惱の殻を壊し、その体を顕すことができるからである。…中略…仏は三身の果を説く。一は住自性の仏性を原因とし、法身を説く。…中略…二は引出の仏性を原因とし、応身を説く。…中略…三は引出の仏性を原因とし、また化身を出す。

ここで特に注意すべきは、同じ『仏性論』では、三種の仏性ととも、二種の仏性も説かれ、その中の引出仏性について、「言引出者、凡有五位。一能出闍提位、二能出外道位、三出声聞位、四出独覚位、五出菩薩無明住地位」と説かれていることである。即ち、一闍提を含むすべての人間はこの引出仏性（＝習種性）を有すると明言している。この解釈によれば、住自性仏性（＝性種性）は言うまでもなく、一切の人間は引出仏性（＝習種性）までも持っており、もし修行すれば、だれでも成仏できる、という結論に至るのではあるまいか。これは『仏性論』が曇無讖訳『地持経』の影響を受けたところであり、梵本・玄奘訳『瑜伽論』とはずれが生じてくると言えよう。

ちなみに、『仏性論』におけるこの三種の仏性は、真諦訳『撰大乘論釈』に見出すことができる。これについて、『撰論釈』は以下のように述べている。

謂信及樂、信有三處、一信實有、二信可得、三信有無窮功德。信實有者、信實有自性住仏性。信可得者、信引出仏性。信有無窮功德者、信至果仏性。起三信已、於能得方便施等波羅蜜中、求欲修行、故名爲樂。此信及樂爲正意体、由得此信樂。¹²

信と樂を言うと、信には三處がある。一は実有であり、二は可得であり、三は有無窮功德である。信実有とは、実有の自性住仏性を信じるのである。信可得とは、引出仏性を信じるのである。信有無窮功德とは、至果仏性を信じるのである。この三信を起しおわり、方便施を得ることができると波

羅蜜において、修行を求めるため、樂と名付ける。この信と樂は正意の体であり、これによってこの信樂を得る。

即ち、「自性住仏性・引出仏性・至果仏性」に対する三つの信が起きると、更に修行するならば、信樂を得ることができる。『撰論釈』におけるこの三つの信の対象である「自性住仏性・引出仏性・至果仏性」は、正に『仏性論』に見られる三種の仏性につながっていると思われる。¹³ この信樂は非常に重要な概念であるため、別稿で改めて検討したい。

では、同じ『仏性論』に同時に見られる三種の仏性と二種の仏性は、どのように理解されるべきであろうか。この問題を解決するために、『仏性論』に説かれる仏身説を検討する必要があると考えられる。上述のように、『仏性論』は「法身・応身・化身」という仏身説を説いている。これは菩提流支系の仏身論と違い、真諦系の仏身論の訳語である。重要なのは、『仏性論』の作者は三身と三仏性と密接な対応性を強調し、仏身論と仏性論とを融合していることである。「仏説三身果、一者因住自性仏性、故説法身。…中略…二者因引出仏性、故説応身。…中略…三者因引出仏性、復出化身」という『仏性論』の仏身説は、住自性仏性＝法身、引出仏性＝応身、引出仏性＝化身、という対応関係を説明している。種姓を重視する『菩薩地持經』は仏身論を説いていないのに対し、仏身について詳しく論ずる『撰大乘論』および『撰大乘論釈』は種姓論をほとんど説いていない。このため、この両者の融合は『仏性論』の特徴の一つと言えよう。

しかし、『仏性論』に見られる三身と三仏性と対応関係には、最も高いレベルにあるはずの至得仏性が見えない。応身と化身が対応する仏性はいずれも引出仏性となっている。その理由は、『仏性論』の二仏性と『菩薩地持經』の二種性と関連性にあると考えられる。つまり、中国仏教においては、インド仏教において主流でない仏性思想を用いて種姓説を入れ替えるために、漢訳『宝性論』などが大きな役割を果たしたと思われる。¹⁴ 真諦訳とされる『仏性論』はこの傾向を継承し、その二仏性と『菩薩地持經』の二種性と対応関係を意識しつつ、仏性説を用いて種姓説・仏身説との対応関係を統轄しようとするものではあるまいか。このため、『地持經』の二種姓と『撰大乘論』の三身説を会通するために、『仏性論』の仏性説は二種の仏性と三種の仏性とが混在する結果となったと考えられる。

一方、最も重要なのは、以上の検討に示されている通り、『仏性論』は「仏性」という概念を利用し、「法身」と「種姓」とを「仏性」に置きかえ、変化して縁起できる有為法の方向に向けて展開している、ということである。具体的に言えば、真諦訳とされる『仏性論』は、「三種仏性者、応得因中具有三性、一住自性性、二引出性、三至得性。記曰、住自性者、謂道前凡夫位。引出性者、從發心以上、窮有學聖位」という解釈を用い、「仏性＝住自性（種）性＝道前凡夫位」および「仏性＝引出（種）性＝發心以上の有學聖位」という図式で、種姓を道前凡夫位と發心以上の有學聖位のような有為法と関連付けるようになっている。これと同じように、「一者因住自性仏性、故說法身。…中略…二者因引出仏性、故說應身。…中略…三者因引出仏性、復出化身」と「諸仏法身有二種、一正得、二正說。言正得法身者、最清淨法界、是無分別智境、諸仏當體、是自所得法。二正說法身者、為得此法身清淨法界正流、從如所化衆生識生、名為正說法身」という解釈を用い、「法身＝住自性（種）性＝仏性」および「清淨法界の正得法身＋衆生識生の正說法身＝法身」という図式で、法身を真如・衆生識によって生じられた有為法と関連付けている。一言で言えば、法身と種姓とは、真諦訳とされる『仏性論』により、無為法でありながら、有為法の性格をも持つと見なされていると言っても過言ではない。

ちなみに、『菩薩地持經』・『瑜伽師地論』・『撰大乘論』・『撰大乘論釈』はいずれも瑜伽行派の唯識經論である。これより見ると、真諦訳とされる『仏性論』は唯識思想にいかにも深く関わっているかが明白であろう。

二、『仏性論』と『宝性論』

『仏性論』は『宝性論』の焼き直しではないかという推測が、長尾雅人博士によって提唱された。服部正明氏はこの意見を継承し、『仏性論』が『宝性論』の異訳的關係にあることを指摘した。¹⁵ また、中村瑞隆氏の研究によれば、『仏性論』と『宝性論』と対照して所々に付加されている説明部分を除き去ると、両論の一致は明らかであることが分かる。¹⁶ 中村氏の指摘通り、『宝性論』と『仏性論』の縁起分第一と弁相分第四を対照すると、『仏性論』はある意味で『宝性論』の注釈であることを知ることができる。

『宝性論』には、次の重要な部分がある。

sā ca sarvesām api mithyātvaniyatasamtānānām sattvānām prakṛtīnirviśiṣṭāpi. (RGV 71)¹⁷

しかし、それ（真如）は、あらゆる、邪性に定まっている諸相続（諸衆生）においても、本性として無差別である。

彼真如如来之性、乃至邪聚衆生身中、自性清浄心無異無差別。¹⁸

その真如如來の性は、邪聚衆生の身の中にまであるが、自性清浄心と異ならず、差別もない。

『宝性論』の梵本では、真如は本性として一切衆生において何の差別もないということが説かれている。しかし、勒那摩提の漢訳になると、その本意はほとんど見えなくなり、「真如＝自性清浄心」というパターンとなっている。¹⁹ここで特に指摘したいのは、筆者の知る限り、中国仏教における仏典漢訳史から見れば、「真如＝自性清浄心」、つまり、自性清浄の語を用いて真如を説明するのは、漢訳『宝性論』が最初であろう、という無視できない事実である。

では、『仏性論』の作者は真如について、どのように説いているか。以下の原文を見てみよう。

自性亦如、無變異故。功德亦如、無増減故。清浄亦如、無染汚故。故曰如如是真如。如在一切邪定聚及一闍提諸衆生中本無差別。若至客塵滅後説名如來藏。故説一切衆生為如來藏。能藏如來不得顯現。為顯此清浄無二故、仏説此經。文殊師利諸仏已出離於我取根本、由此自性清浄一切衆生清浄、是自性清浄與衆生清浄無有二故。²⁰

自性も如である。変異がないからである。功德も如である。増減がないからである。清浄も如である。染汚がないからである。この故に、如如は真如である、と説く。この如は一切の邪定聚と一闍提などの諸々の衆生の中においてもともと差別がない。もし客塵が減びるならば如來藏と言われる。このため、一切衆生が如來藏であると説く。如來を包蔵することができ、顯れることができない。この清浄無二を顯すために、仏はこの經を説いた。文殊師利などの諸仏はすでに我取根本から離れているため、自性清浄は一切衆生の清浄に応じる（一切衆生の清浄は自性清浄であるべき）。この自性清浄は衆生の清浄と異ならないからである。

この部分に関し、まず注意すべきは、「如在一切邪定聚及一闍提諸衆生中本無差別。…中略…由此自性清淨心一切衆生清淨、是自性清淨與衆生清淨無有二故」という一節である。上述の『宝性論』の関連部分と対照して見れば分かるように、『仏性論』のこの解釈は『宝性論』の梵本と漢訳をともに参照していると思われる。『仏性論』の「如在一切邪定聚及一闍提諸衆生中本無差別」は梵本『宝性論』の「sā ca sarvesām api mithyātvaniyatasamṭānānām sattvānām prakṛtīnirviśiṣṭāpi (真如は、あらゆる、邪性に定まっている諸衆生においても、本性として無差別である)」につながっており、『仏性論』の「自性清淨心一切衆生清淨」は漢訳『宝性論』の「乃至邪聚衆生身中、自性清淨心無異無差別」につながっていると考えられる。一方、『仏性論』の「故曰如如是真如」はその時代の中国人によってつくられた解釈であろう。

真如以外、如来蔵について、『仏性論』は、

復次如来蔵義有三種応知。何者为三。一所撰蔵、二隱覆蔵、三能撰蔵。一所撰名蔵者、仏説約住自性如如、一切衆生是如来蔵。言如者、有二義。一如如智、二如如境、並不倒故名如如。言来者、約從自性来、来至至得、是名如来。故如来性雖因名、心得果名、至得其体不二。…中略…由此果能撰蔵一切衆生故、説衆生为如来蔵。二隱覆为蔵者、如来自隱不現、故名為蔵。言如来者、有二義。一者現如不顛倒義、由妄想故、名為顛倒。不妄想故、名之為如。二者現常住義、此如性從住自性性来至至得、如体不變異故是常義。如来性住道前時、為煩惱隱覆、衆生不見故名為蔵。三能撰為蔵者、謂果地一切過恒沙数功德、住如来心應得性時、説之已尽故。若至果時方言得性者、此性便是無常。何以故。非始得故、故知本有、是故言常。²¹

また如来蔵の義に三種があることを知るべきである。この三種は何かと言うと、一は所撰蔵であり、二は隱覆蔵であり、三は能撰蔵である。一の所撰蔵は、仏は住自性の如如に約して一切の衆生は如来蔵であると説く。如とは、二義がある。一は如如智であり、二は如如境である。並べて顛倒しないため如如と言われる。来とは、約して自性より来、至得に至り、如来と言われる。この故に、如来の性は因名と雖も、果名を得るべきである。至得の体は不二である。…中略…この果によって一切の衆生を撰蔵することができるので、衆生が如来蔵であることを説く。二の隱覆蔵は、如来は

自ら隠れて現れないため、蔵と言われる。如来とは、二義がある。一は如の不顛倒の義を現し、妄想によって顛倒と言われ、不妄想によって如と言われるのである。二は常住の義を現し、この如性は住自性性より至得性に至り、如の体は変異しないので常の義である。如来の性が道前に住む時、煩惱に隠覆され、衆生がそれを見ることができないため、蔵と言われる。三の能撰蔵は、果地の一切の恒沙の数をこえる功德は、如来が応得性に住する時に、すでに説き終わっているのである。もし果に至る時になってはじめて性を得たと言うならば、この性は即ち無常である。なぜかと言うと、始得ではないので、本有と知ることができる。この故に、常と言われるのである。

と述べている。この部分によれば、如 (= 真如 = 如如) は本有であり、一切の衆生にとって平等に存在している。この如は住自性仏性 (= 性種性 = 本性住種姓) より引出仏性 (= 習種性 = 習所成種姓) および至得仏性に至るまで常に現れている。これにより、一切の衆生は引出仏性 (= 習種性 = 習所成種姓) を有しても不思議ではないであろう。これを通して真如と種姓とは同一視されるようになっていく。

周知のように、漢訳『宝性論』は梵本にしばしば見られる「gotra (種姓・種性)」をほとんど「性・仏性・真如仏性」に翻訳している。「種姓・種性」の語は漢訳『宝性論』には全く出てこない。²²興味深いのは、『宝性論』の影響を受けた『仏性論』も、その漢文テキストに「種姓・種性 (gotra)」の語が全く見えないことである。その代わりに、種姓の具体的な代名詞である住自性性や引出性などを通し、仏性と真如を会通しようとしている。『仏性論』の漢文テキストは漢訳『宝性論』を参照していることを否定できないであろう。

「一所撰名蔵者、仏説約住自性如如、一切衆生是如来蔵」という表現から見ると、『仏性論』の作者は如如 (= 真如) を如来蔵の一種である所撰蔵と見なしている。「三能撰為蔵者、謂果地一切過恒沙数功德」という表現は、『勝鬘經』に見られる法身に関する表現を勘案すれば、この能撰蔵は法身につなっているとと思われる。漢訳『宝性論』によれば、煩惱の束縛を受けている真如仏性は如来蔵と言われる。これは上述の『仏性論』のいわゆる隠覆蔵であろう。つまり、『仏性論』における隠覆蔵の原型は『宝性論』における「gotra (種姓)」の漢訳であった「仏性」であり、その如来蔵が転身 (āśraya-parivṛtti)

(玄奘訳でいうと転依) し、法身を証得する時、如来法身と言われる。これにより、漢訳『宝性論』と『仏性論』とは、インド仏教の「gotra (種姓)」を変えていると考えられる。

一般の三身説以外、『仏性論』の作者は法身を更に分類する場合もある。以下のように説かれている。

因三種自性為顯心清浄界、名如来蔵、故説九種如蓮花等譬。三種自性者、一者法身、二如如、三仏性。合此九譬為三、初三譬法身、次一譬如如、後五譬仏性。云何如此明。諸仏法身有二種、一正得、二正説。言正得法身者、最清浄法界、是無分別智境、諸仏当体、是自所得法。二正説法身者、為得此法身清浄法界正流、從如所化衆生識生、名為正説法身。²³

三種の自性は心清浄界を顯すため、如来蔵と言われる。この故に、蓮花などの九種の譬を説く。三種の自性とは、一は法身であり、二は如如であり、三は仏性である。この九つの譬をあわせて三と為し、初めの三つの譬は法身を指し、次の一つの譬は如如を指し、後の五つの譬は仏性を指す。なぜこのように言うかということ、諸々の仏の法身には二種がある。一は正得であり、二は正説である。正得法身とは、最も清浄な法界である。これは無分別智の境であり、諸々の仏の当体であり、自所得法である。正説法身とは、この法身清浄法界正流を得るために、如の所化の衆生の識より生じ、正説法身と言われる。

ここに見られる「正得法身」と「正説法身」は、筆者の知る限り、中国仏教の漢文文献においては、智儼 (602-668)、円測 (613-696)、法蔵 (643-712) の著作以外、『仏性論』にしか見られない。『仏性論』の解釈によれば、正得法身は清浄法界であることが分かる。問題は正説法身にある。『仏性論』はこの正説法身が真如に従って衆生の識につながっていると述べている。これにより、もともと無為であった法身は、『仏性論』によって有為法のように変化できるものに変えられているのではあるまいか。これは『宝性論』における法身説の域を出ているように思われる。

最後に検討しなければならないのは、「仏性清浄正因」の問題である。漢訳『宝性論』に見られる「仏性清浄正因」は、現存の梵本に対応できないものであることを認めざるを得ない。漢訳『宝性論』では同じく「仏性」と翻訳され

ているのに対し、梵本においては「gotra」と「buddhadhātu」との両方が併存している場合がある。

buddhadhātuḥ sacenna syānnirvidduḥkhe 'pi no bhavet /
 necchā na prārthanā nāpi prāṇidhīrniṣṭau bhavet // 40 //
 tathā cōktaṃ / tathāgatagarbhaścedbhagavanna syānna syādduḥkhe 'pi nirvinna
 nirvāṇa icchā vā prārthanā vā praṇidhīrveti / tatra samāsato buddhadhātuviśuddhi-
 gotraṃ mithyātvaniyatānāmapi sattvānāṃ dvividhakāryapratyupasthāpanaṃ
 bhavati / …中略…
 bhavanirvāṇatadduḥkhasukhadōṣaguṇekṣaṇaṃ / gotre sati bhavatyetadagotrāṇāṃ
 na vidyate // 41 //
 yadapi tat saṃsāre ca duḥkhadōṣadarśanaṃ bhavati nirvāṇe ca
 sukhānuśamsadarśanametadapi śuklāṃśasya pudgalasya gotre sati bhavati
 nāhetukaṃ nāpratyayamiti / yadi hi tadgotramantareṇa syādahetukamapratyayaṃ
 pāpasamucchedayogena tadicchāntikānāmapyaparinirvāṇagotrāṇāṃ syāt //

(RGV, 35-37)²⁴

「もし仏性がなければ、苦を嫌うこともなくなるであろう。また、涅槃に対する欲求もなくなるであろう。」同じく説かれている。「世尊よ、もし如来蔵が存在しないならば、苦を厭うこともなく、涅槃に対する欲求もないであろう、と。」ここでまとめて言うと、仏性という清浄な種姓（清浄化された種姓か²⁵）（buddhadhātuviśuddhigotra）が邪定聚の衆生にも存在し、二種の結果を起こしている。…中略…輪廻と涅槃について、その苦と楽、過失と功德を見ると、これは種姓があるから存在するものであり、種姓のないものには存在しない。この輪廻と涅槃において、苦と楽、過失と功德を見ることは、福のある人にとって種姓のある時に限って存在するのであり、決して無因ではない、と。

若無仏性者、不得厭諸苦、不求涅槃樂、亦不欲不願。以是義故、『聖者勝鬘經』言、世尊、若無如来蔵者、不得厭苦樂求涅槃、亦無欲涅槃、亦不願求、如是等此明何義？略説仏性清浄正因於不定聚衆生能作二種業。…中略…見苦果樂果、此依性而有、若無仏性者、不起如是心。²⁶

もし仏性がなければ、諸々の苦を厭うことができず、涅槃の樂を求めるこ

とができず、欲求することも願うこともできない。このため、『聖者勝鬘經』に、「世尊よ、もし如来蔵がなければ、苦楽を厭うことも涅槃を求めることもできず、また涅槃を欲求して願うこともできない」と説かれている。これらは何の義を明かすか？略して仏性清浄正因が不定聚の衆生においても二種の業をつくることができることを説く。…中略…苦果と楽果を見ること、これは性によって存在し、もし仏性がなければ、このような心を起こすことはできない。

梵本では、「gotra (種姓)」と「buddhadhātu (仏性)」とが同時に存在し、「buddhadhātuvisuddhigotra (仏性という清浄な種姓、または仏性という清浄化された種姓)」が邪定聚の衆生にも存在していることが説かれている。しかし、漢訳『宝性論』はここで両者をほとんど「仏性」と翻訳し、その区別がつかなくなったのである。特に、梵本に見られる「buddhadhātuvisuddhigotra (仏性という清浄な種姓、または仏性という清浄化された種姓か)」という表現は、漢訳になると、「仏性清浄正因」になっている点が重要であろう。つまり、「gotra (種姓)」の語が漢訳本では翻訳されていない。

『仏性論』の同じ段落においては、「仏性清浄因」と「正因」とが説かれている。

以信樂等四種為因、令諸菩薩修習此因、得至無上法身清浄波羅蜜、是名仏性清浄因。如是之人、得名仏子。是故仏子有於四義、一因、二縁、三依止、四成就。初言因者、有二、一仏性、二信樂。此兩法仏性、是無為信樂。是有為信樂約性得仏性為了因、能顯了正因性故。信樂約加行為生因、能生起衆行故。²⁷

信樂などの四種を因と為し、諸々の菩薩にこの因を修習させ、無上の法身清浄波羅蜜に至らせることができる。これを仏性清浄因と名付ける。このような人は、仏子と言われる。このため、仏子には四義がある。一は因であり、二は縁であり、三は依止であり、四は成就である。初めに因とは、二つの因がある。一は仏性であり、二は信樂である。この兩法の仏性は無為信樂である。有為信樂は性に約して仏性を得ることを了因と為す。正因の性を顯わすことができるからである。信樂は加行に約して生因と為す。衆行を起こせるからである。

ここの「得至無上法身清浄波羅蜜、是名仏性清浄因」と「此両法仏性、是無為信樂。是有為信樂約性得仏性為了因、能顯了正因性故」をあわせて勘案すれば、「清浄な法身＝仏性清浄因＝無為信樂＝正因性」という結論を得ることができよう。上述の通り、『宝性論』の梵本に見られる「buddhadhātuvisuddhigotra（仏性という清浄な種姓、または仏性という清浄化された種姓）」という表現は、漢訳になると、「仏性清浄正因」になっている。このため、『仏性論』の漢文テキストに見られる「仏性清浄因（＝正因性）」の語は、漢訳『宝性論』に見られる「仏性清浄正因」という訳語に遡れることは明白であろう。問題となるのは、漢訳『宝性論』と『仏性論』とに見られるこの「仏性清浄（正）因」は、梵本での原語は「buddhadhātuvisuddhigotra」であり、即ち仏性という清浄な種姓、あるいは仏性という清浄化された種姓を意味することである。つまり、『宝性論』の梵本では清浄な状態となった「gotra（種姓）」こそが仏性であることが明確に説かれているにもかかわらず、漢訳『宝性論』と『仏性論』になると、種姓説との関係がはっきりしない「仏性清浄（正）因」になっている。²⁸これは甚だ重要な問題点であり、今後の課題にしたい。

おわりに

周知のように、梵本『宝性論』においては、「法身・真如・種姓」は如来蔵の同義語または定義である。本論の検討のように、真諦訳とされる『仏性論』は、「仏性」の語を介し、この三種の概念を有為法の方向に向けようとしているように思われる。『仏性論』の漢文テキストは、漢訳『宝性論』の影響を受け、梵本『宝性論』以上に如来蔵の有為法としての性格を強調しようとしているのではあるまいか。こうした点に注意を払いつつ、『仏性論』がどのような目的のもとにつくられたかという問題を更に考察するのが今後の課題である。

註

- 1 高崎直道『高崎直道著作集第七巻－如来蔵思想・仏性論Ⅱ』、春秋社 2010年、173頁。
- 2 宇井伯寿「真諦三蔵伝の研究」(『印度哲学研究(第六)』、甲子社書房 1930年、23-33頁)を参照されたい。
- 3 真諦訳『仏性論』、『大正蔵』31・794a。

- 4 『仏性論』の「応得因」・「加行因」・「円満因」という三因は、玄奘訳『瑜伽師地論』の「菩薩地」の「堪任性持」・「加行持」・「所円満大菩提持」という三持に非常に近い表現であろう。しかし、類似の表現は『瑜伽論』の同本異訳である曇無讖訳『菩薩地持経』に見つからない。
- 5 高崎直道『仏性論・大乘起信論』（大蔵出版社 2005 年、121 頁）、金成哲「種姓無為論の起源に関する一考察—『宝性論』と『仏性論』の‘gotra’の翻訳用例を中心として—」（『東アジア仏教学術論集・第 2 号』、東洋大学東洋学研究所 2014 年）ほか参照。
- 6 *Bodhisattvabhūmi*, ed. by N. Dutt, Patna, 1966.
- 7 曇無讖訳『菩薩地持経』、『大正蔵』30・888a。
- 8 玄奘訳『瑜伽師地論』、『大正蔵』30・478c。
- 9 この問題に関しては、拙稿「『究竟一乘宝性論』の「gotra（種姓）」について—なぜ勒那摩提は漢訳本でこの語を翻訳しなかったか—」（『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』第 48 号、2015 年）を参照されたい。
- 10 『大乘四論玄義』には「引出性即是十二因縁所生法、観知了因性。自性住是非因非果仏性正因性也。地論師云、分別而言之、有三種。一是理性、二是体性、三是縁起性。隠時為理性、顕時為体性、用時為縁起性也」（X46, 602a）とある。つまり、「住自性・自性住」という性を、地論師たちは縁起できる有為法として解釈する。『仏性論』に見られる「記曰・釈曰」の部分に漢訳本に入れた人々は、このような解釈をする地論師などの中国人であることが推測される。
- 11 真諦訳『仏性論』、『大正蔵』31・808bc。
- 12 真諦訳『撰大乘論釈』、『大正蔵』31・200c。
- 13 『仏性論』だけではなく、「自性住仏性」は『大乘四論玄義』などにも出る言葉である。その根拠は同じく真諦訳『撰大乘論釈』にあるとされる。『大乘四論玄義』に見られる「自性住仏性」について、吉村誠「『四論玄義』に見られる真諦の心識説」（2007 年度駒澤大学仏教学会第二回定例研究会 [2008.1.26] の発表資料）、同『中国唯識思想史研究—玄奘と唯識学派—』（大蔵出版 2013 年）を参照されたい。もっと重要なのは、嘉祥吉蔵の仏性に対する理解が『仏性論』などの経論に基づくことである。この点に関しては、奥野光賢先生からご教示を頂いた。ここに記して感謝の意を表したい。吉蔵の『仏性論』依用については、今後の課題にしたい。
- 14 前掲の拙稿「『究竟一乘宝性論』の「gotra（種姓）」について—なぜ勒那摩提は漢訳本でこの語を翻訳しなかったか—」参照。
- 15 服部正明「仏性論の一考察」、『仏教史学』通巻第 15 号、1955 年。
- 16 中村瑞隆『梵漢対照究竟一乘宝性論研究』、山喜房仏書林 1971 年、57 頁。
- 17 *Ratnagotravibhāga*, ed. by Edward Hamilton Johnston, Patna, 1950.
- 18 勒那摩提訳『究竟一乘宝性論』、『大正蔵』31・838c。
- 19 拙稿「『大乘起信論』の如来蔵思想の再検討—『勝鬘経』・『楞伽経』・『宝性論』との対比を中心として—」（『印度学仏教学研究』第 63 巻、2014 年）、同「『大乘起信論』の如来蔵思想の再検討—真如との関係を中心として—」（『東アジア仏教研究』第 13 号、2015 年）参照。

- 20 真諦訳『仏性論』、『大正蔵』31・808b。
- 21 真諦訳『仏性論』、『大正蔵』31・795c-796a。
- 22 小川一乗「『宝性論』と『仏性論』」(平川彰編『如来蔵と大乘起信論』、春秋社1990年)、松本史朗『仏教思想論・下』(大蔵出版2013年)第四章、前掲の拙稿「『究竟一乘宝性論』の「gotra (種姓)」について—なぜ勒那摩提は漢訳本でこの語を翻訳しなかったか—」ほか参照。
- 23 真諦訳『仏性論』、『大正蔵』31・808a。
- 24 *Ratnagotravibhāga*, ed. by Edward Hamilton Johnston, Patna, The Bihar Research Society, 1950.
- 25 前掲の松本説による。
- 26 勒那摩提訳『究竟一乘宝性論』、『大正蔵』31・831ab。
- 27 真諦訳『仏性論』、『大正蔵』31・798a。
- 28 『宝性論』の梵本に見られる「*buddhadhātuvisuddhigotra*」という原語について、高崎直道博士は「仏性という清浄な種姓」と和訳し、松本史朗博士は「仏性という清浄化された種姓」と和訳している。いずれも「*buddhadhātu* (仏性)」と「*gotra* (種姓)」との関係を説明しようとするものである。これについて、前掲の松本史朗『仏教思想論・下』(大蔵出版社2013年)第四章を参照されたい。つまり、真諦訳とされる『仏性論』は「*buddhadhātuvisuddhigotra*」を「仏性清浄(正)因」と漢訳することには、種姓説の欠落という問題があると言わざるを得ない。

(本稿は平成27年度日本学術振興会科学研究補助金〈特別研究員奨励費〉の助成を受けたものであり、その研究成果の一部である。)